

朝鮮半島への日本人の漁業進出史に関する文献リスト (1893~2010)

原 田 環

I. 解 説

このリストは、1893年から2010年までの、朝鮮半島への日本人の漁業進出史に関する文献を整理したものである。

1) 研究史

まず時期区分すると、①戦前と②戦後に大別でき、②戦後はさらに a) 1940年代~1980年代、b) 1990年代~現在に、大きく区分できる。

①の時期に該当するものはNo.1~4、②-a)の時期に該当するものはNo.5~40、②-b)に該当するものはNo.41~87である。

②-a)の時期において中心的役割を果たしたのは、日本の吉田敬市と韓国の朴九秉で、吉田敬市のは3点 (No.5、6、30)、朴九秉のは15点 (No.9、10、12、16、17、18、20、22、23、25、26、29、33、37、38) ある。

②-b)の時期では、今日までの処、日本の内藤正中と韓国の呂博東が中心な役割を果たしている。内藤正中のは6点 (No.41、42、54、61、65、79) あり、呂博東のは8点 (No.48、49、50、51、57、58、67、71) ある。

2) 論争点

論争は②の時期において展開されている。まず②-a)について。

吉田敬市のNo.6は、朝鮮半島への日本人の漁業進出史のみならず、近代朝鮮漁業史研究の基本的文献になるものであり、1954年に朝水会(下関)から出版された。朝水会は戦後朝鮮半島から引き揚げた水産関係者の団体である。

吉田敬市はNo.6において、近代以前の朝鮮の漁業史、明治以降の日本人による通漁漁業、移住漁業、自由漁業、水産製造工業の発展、水産貿易、漁業制度の確立などを戦前の現地調査を踏まえて検討している。

これに対して朴九秉は、日朝通漁条約(1883)、韓国漁業法(1908)、漁業法(1911)、朝鮮漁業令(1929)等を通して、漁業権を手がかりに、戦前の朝鮮漁業史を日本による侵奪と見ている。

②-b)では、内藤正中と呂博東等が中心となり、広島、岡山、島根、鳥取、山口、香川等の各県人の朝鮮出漁の検討が進められている。

II. 文献リスト

1. 関沢明清・竹中邦香(1893)、『朝鮮通漁事情』、団団社書店
2. 葛生修吉(1903)、『韓海通漁指針』、黒龍会出版部
3. 青柳南冥(1908)、『韓国植民策』、輝文館(大阪)、日韓書房(京城)
4. 東亜日報(1934)、「社説 通漁者に対する差別政策」(日付不明)(『朝鮮通信』、1934年2月22日付、第94号第2366号、所収)

5. 吉田敬市 (1948)、「韓国末期の朝鮮漁業」、『人文科学』<京大・人文研> 2-3
6. 吉田敬市 (1954)、『朝鮮水産開発史』、朝水会
7. 羽原又吉 (1957)、『日本近代漁業経済史 下巻』、岩波書店、1982 復刻版
8. 김덕호 (1962)、「1932년 제주도 해녀들의 반일투쟁」、『력사과학』1962년 4 호 ※
9. 朴九秉 (1962)、「日本資本主義 勢力의 韓国水産業侵入過程」、『白鯨』、釜山水産大学学生会 ※
10. 朴九秉 (1963)、『韓国水産漁業史』、大韓出版社 ※
11. 玄季順 (1964)、『韓末韓日漁採問題의 一考察 - 濟州漁採問題를 中心으로 -』、ソウル大学校大学院修士論文 ※
12. 朴九秉 (1966)、『韓国水産業史』、太和出版社 ※
13. 金振九 (1966)、『韓国漁業史・捕鯨史』、國際聯合食料農業機構韓国協会 ※
14. 李元淳 (1967)、「韓末 濟州島通漁問題一攷」、『歴史教育』10、歴史教育研究会 ※
15. 中井昭 (1967)、『香川県海外出漁史』、香川県・香川県海外漁業協力会
16. 朴九秉 (1967 a)、「韓・日近代漁業関係研究 (1896~1910)」、『釜山水産大学研究報告』7-1 ※
17. 朴九秉 (1967 b)、「開港以後의 釜山의 水産業」、『港都釜山』6、釜山市史編纂委員会 ※
18. 朴九秉 (1968)、「韓国漁業技術史」、『韓国文化史大系 3』、高麗大学校民族文化研究所出版部 ※
19. 水産史編纂委員会 (1968)、『韓国水産史』、(韓国)水産庁 ※
20. 朴九秉 (1970)、「韓末東海捕鯨漁業을 둘러싼 露日의 角逐」、『亜細亞研究』13-2、高麗大学校亜細亞問題研究所 ※
21. 崔泰鎬 (1971)、「日帝下의 韓国水産業에 関한 研究」、『日帝의 經濟侵奪史』、高麗大学校亜細亞問題研究所 ※
22. 朴九秉 (1974 a)、「뎡앗긴生活圈 (II) =水産業』、『韓国現代史 2』、新丘文化社 ※
23. 朴九秉 (1974 b)、「마다 잃는 漁夫들 =水産業』、『韓国現代史 4』、新丘文化社 ※
24. 한우근 (1971)、「開港後 日本漁民의 浸透 (1860~1894)」、『東洋学』1、檀国大学校東洋学研究所 ※
25. 朴九秉 (1972)、「19世紀末、韓・日間의 漁業에 適用된 領海 3 海里原則에 関하여」、『韓日關係』1、韓国日本問題研究所 ※
26. 朴九秉 (1975)、『韓国漁業史』(正音文庫73)、正音社 ※
27. 李炫熙 (1975 a)、「日帝侵略下 韓國漁民의 漁權守護運動 - 社会運動의 一例」、『研究論文集』8、誠信女子師範大学人文科学研究所 ※
28. 李炫熙 (1975 b)、「일제하 한국어민의 어권수호운동」(하)、『새어민』89、수산업협동조합중앙회 ※
29. 朴九秉 (1978)、「韓国鯉漁業史』、『釜山水産大学論文集 (人文・社会科学編)』21 ※
30. 吉田敬市 (1978)、「第三章 朝鮮をめぐる日本漁業」、岡本達明編『近代民衆の記録 7 - 漁民』、新人物往来社
31. 李炫熙 (1979)、「日帝被占下韓國의 漁權守護運動』、『韓国近代史의 模索』、二友出版社 ※
32. 具良根 (1980)、「近代日本의 对韓通漁政策과 朝鮮漁村과의關係』、『人文科学研究 1980』、朝鮮大学校人文科学研究所 ※
33. 朴九秉 (1983)、「漁業權制度와 岸漁場所有利用形態의 變遷에 関한研究 - 韓末부터日帝까지 -」、『釜山水産大学論文集』30 ※
34. 藤永壮 (1985)、「韓国における近代漁業史研究の現況 - 朴九秉氏の近業をめぐって -」、『朝鮮史

研究会会報』〈朝鮮史研究会〉82

35. 高林直樹 (1985)、「朝鮮における千葉村」、『千葉県の歴史』30
36. 金玉卿 (1986)、「開国後漁業에 관한 연구」、『大韓帝国研究 (V)』梨花女子大学校韓国文化研究院 ※
37. 朴九秉 (1987 a)、『韓半島沿海捕鯨史』、太和出版社 ※
38. 朴九秉 (1987 b)、『韓国捕鯨史』、水産業協同組合中央会 ※
39. 藤永壮 (1987)、「植民地下日本人漁業資本家の存在形態—李垞家漁場をめぐる朝鮮漁民との葛藤—」、『朝鮮史研究会論文集』24
40. 崔泰鎬 (1988)「開化期 韓國漁民의 漁權守護運動」、『경상논총』10、国民大学校經濟研究所 ※
41. 内藤正中 (1991)、「島根県人の鬱陵島進出」、『山陰地域研究』7、島根大学山陰地域研究総合センター
42. 内藤正中 (1992)、「明治期島根漁民の朝鮮海進出」、『経済科学論集』18<島根大学法文学部紀要>
43. 崔吉城 (1992)、『日帝時代—漁村の文化変容』、亜細亜文化社、ソウル ※
(日本語訳は、『日本植民地と文化変容』、御茶の水書房、東京、1994)
44. 金秀姫 (1992)、『近代韓国漁業に関する研究—日本漁民の進出過程を中心にして—』、東京学芸大学大学院修士論文
45. 高秉雲 (1993)、「日本の朝鮮漁業利権収奪と『移住漁村』建設について」、『東アジア研究』5 (後に、『略奪された祖国』<雄山閣、東京、1995>第2章に収める)、大阪経済法科大学アジア研究所
46. 朴光淳 (1994)、「日本の 韓国漁場 침탈과 漁民의 対応—19세기 말~20세기 초를 중심으로」、『경제사학』18、經濟史学会 ※
47. 金秀姫 (1994)、「朝鮮開港以後に於ける日本漁民の朝鮮近海漁業の展開」、『朝鮮学報』153
48. 呂博東 (1994 a)、「日帝 統營·巨濟地域의 日本人移住漁村 形成과 漁業組合」、『日本学誌』14、啓明大學校日本文化研究所 ※
49. 呂博東 (1994 b)、「日本人移住漁村 形成과 漁業組合」、『日本学誌』14、啓明大學校日本文化研究所 ※
50. 呂博東 (1995)、「日帝時代 巨濟島 이리사무라 (入佐村)의 形成」、『日本学誌』15、啓明大学校日本文化研究所 ※
51. 呂博東 (1996)、「植民地 時期 統營 오가야마촌 (岡山村)의 形成」、『日本学誌』16、啓明大学校国際学研究所日本研究室 ※
52. 古田悦造 (1996)、『近世魚肥流通の地域的展開』、古今書院
53. 益田庄三 (1996)、『島根県の水産翁 佐々木準三郎伝』、行路社
54. 内藤正中 (1997)、「鳥取県人の朝鮮海漁業進出」、『北東アジア文化研究』6、鳥取女子短期大学
55. 神谷丹路 (1998)、「日本漁民の朝鮮への植民過程をたどる—岡山県和気郡日生漁民を中心にして」、『青丘学術論集』13、韓国文化研究振興財団
56. 清水満幸 (1998)、「鱧延縄漁と萩地方漁船の朝鮮半島近海への出漁」、『萩市郷土博物館研究報告』9
57. 呂博東 (1999)、「近代 広島県 漁民의 朝鮮海 漁業關係研究」、『日本学誌』19、啓明大学校国際学研究所日本研究室 ※
58. 呂博東 (1999)、「일제시기 히로시마현 에다지마초 (江田島町) 어민의 조선해 어업관계 연구」、『日本学報』43、韓国日本学会 ※

59. 窪田和美 (2000)、「瀬戸内沿岸漁村の社会構造—明治から大正期の岡山県和気郡日生村—」、『龍谷大学社会学部紀要』16
60. 金柄徹 (2000, 2002)「帝国主義と漁民の移動—広島県豊島漁民の『朝鮮海』出漁に関する歴史人類学的考察(1)(2)」、『亜細亜大学国際関係紀要』9-1/2、10-1 (後に、『家船の民族誌』<東京大学出版会、2003>第3章に収める)
61. 内藤正中 (2000)、「角輪組の朝鮮江原道漁業の進出」、『北東アジア文化研究』12、鳥取女子短期大学
62. 河原典史 (2001 a)、「植民地期の韓国済州島における日本人経営の缶詰製造業—竹中缶詰製造所の済州分工場を中心に—」、高木正朗編『地域情報研究シリーズ 3 空間と移動の歴史地理』、立命館大学
63. 河原典史 (2001 b)、「植民地期の済州島における日本人漁民の活動」(藤田明良他「島嶼から見た朝鮮半島と他地域の交流」の第三部)、『青丘学術論集』19、韓国文化研究振興財団
64. 窪田和美 (2001)、「日本からの移住漁民にみられる職業倫理—韓国方魚津の場合—」、『龍谷大学社会学部紀要』18
65. 内藤正中 (2001)、「角輪組の朝鮮江原道漁業の進出(Ⅱ)」、『北東アジア文化研究』13、鳥取女子短期大学
66. 木京睦人 (2001)、「山口県の朝鮮沿海漁業調査」、『山口県地方史研究』86
67. 呂博東 (2001)、「근대가가와현 (香川県) 어민의 조선해어업관계」、『日本学報』47、韓国日本学会 ※
68. 窪田和美 (2002)、「移住漁民の宗教倫理—朝鮮半島沿岸の方魚津本願寺」、『龍谷大学社会学部紀要』22
69. 藤井賢二 (2002)、「日韓漁業問題の歴史的背景—旧植民地行政機関の漁業政策比較の視点ら」、『東アジア近代史』5、東アジア近代史学会
70. 国史編纂委員会 編 (2002)、『韓日漁業関係』、(韓国) 国史編纂委員会
71. 呂博東 (2002)、『일제의 조선어업지배와 이주어촌 형성』、韓国日本学協会 ※
72. 北脇義友 (2003)、「岡山県における朝鮮漁業について」、『岡山県地方史研究』100
73. 中山富弘 (2003)、「広島県深沼漁業組合の朝鮮海出漁—明治三十年の伝習操業の一事例」、岸田裕之編『中国地域と対外関係』、山川出版社
74. 中野泰 (2003)、「植民地漁業の社会的求心力—朝鮮半島近海における日本人漁民を例として」、『立命館言語文化研究』14-1
75. 朴重信・布野修司 (2004)、「日本植民地期における韓国の日本人移住漁の形成に関する研究—巨文島・巨文港を対象として」、『日本建築学会計画系論文集』577
76. 김수희 (金秀姬) (2004)、「개항기 한국내의 일본인 어민의 조직화과정」、『수산연구』20、한국수산경영기술연구원 ※
77. 장수호 (2004 a)、「조선왕조말기에 있어서 일본포경업의 입어」、『수산연구』20、한국수산경영기술연구원 ※
78. 장수호 (2004 b)、「조선왕조말기 일본인에 허용한 입어와 어업합병」、『수산연구』21、한국수산경영기술연구원 ※
79. 内藤正中 (2005)、「角輪組の朝鮮江原道漁業の進出(Ⅲ)」、『北東アジア文化研究』21、鳥取短期大学
80. 朴重信・金泰永・布野修司 (2005)、「韓国・九龍浦の日本人移住漁村の居住空間構成とその変

- 容)、『日本建築学会計画系論文集』595
81. 朴重信・金泰永・布野修司他 (2005)「韓国・外羅老島の日本人移住漁村の居住空間構成とその変容」、『日本建築学会計画系論文集』595
 82. 三井田恒博 (2006)、『近代福岡県漁業史』、海鳥社
 83. 片岡千賀之 (2006)、「あんこう網漁業の発達—有明海での生成と朝鮮海出漁」、『長崎大学水産学部研究報告』87
 84. 河原典史 (2007)、「植民地期の朝鮮における水産加工業—缶詰製造業を中心に—」、山根拓・中西僚太郎編『近代日本の地域形成 歴史地理学からのアプローチ』、海青社
 85. 伊藤康宏 (2008)、「島根漁民の朝鮮近海出漁」、(島根県)竹島問題を学ぶ講座第6回講義記録
 86. 伊東雅之・道面雅量 (2010)、「刻まれた記憶 韓国併合100年 第1部『移住村 統営』」①～⑦、『中国新聞』2010年1月3、5、6、7、8、9、12日付
 87. 김수희 (2010)、『근대 일본어민의 한국진출과 어업경영』、景仁文化社 ※
 88. 布野修司・韓三健・朴重信・趙聖民 (2010)、『韓国近代都市景観の形成—日本人移住漁村と鉄道町』、京都大学学術出版会
 89. 朴炳涉 (2010)、「明治時代の鬱陵島漁業と竹島=独島問題1」、『北東アジア文化研究』31、鳥取短期大学

- 注) 1. ※は韓国語、他は日本語。但しNo.69は日韓両語が用いられている。
2. 県史、町史(日本)、道史(韓国)、市史に掲載されたものは、ここでは基本的に取り上げていない。

〔本稿は、科研の基盤研究(A)「朝鮮半島南部の移住漁村『日本村』に関する調査研究」(代表：崔吉城東亜大学教授、平成19年度～平成21年度)の研究成果の一部である。〕

Abstract

Bibliography on the history of the Japanese expansion into Korean fisheries (1893～2010)

Tamaki HARADA

This is a list of the documents published between 1893 and 2010 about the Japanese fishery advance to the Korean Peninsula. These documents are divided roughly into the prewar and the post war periods, and the later period is further divided into two periods. The researches by Keiichi Yoshida and Park Gubyeong are included in the early Post-war period. Keiichi Yoshida analyses the Japanese fishery advance to the Korean Peninsula as a part of development of the history of fishery in the Korean Peninsula, whereas Park Gubyeong considers it as the aggression by Japanese fishermen toward the Korean Peninsula. More recently, there are energetic studies done by Seichu Naito and Ryeo Bakdong.

正誤表

P.75 本文7行目

(誤) No.41～87である。

(正) No.41～89である。